

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2016

課題番号：25381124

研究課題名（和文）日本型早期選抜及びその準備教育にみられるペアレントクラシーに関する実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on the Parentcracy Observed in Japanese-Style Early Selection and Preparatory Education for it.

研究代表者

望月 由起（MOCHIZUKI, YUKI）

昭和女子大学・総合教育センター・准教授

研究者番号：50377115

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本特有の早期選抜である「中学受験」及びその準備教育に潜むペアレントクラシーについて、実証的な調査分析を行った。「児童の学習行動や将来展望」「家庭の経済力」「保護者の社会観、我が子に対する教育戦略」に関する各種調査とともに、「高学歴者の幼少時の学習行動や将来展望、親との関わり」に関する振り返り調査などを行った結果、「中学受験準備期間の長期化」「見据える『教育』の多様化」といった傾向が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study conducted an empirical research analysis on the potential parentcracy in “Junior high school entrance examination” that is an early selection unique to Japan and preparatory education for it. As the result of conducting various researches on “Learning behaviors and Future prospects of children”, “Household economic resources”, “Parents’ views of society and Educational strategies for their children” as well as reviewing researches on “Learning behaviors, Future prospects, and Interactions with parents of the people of superior education in their childhoods”, the tendencies were suggested such as “Prolongation of the preparatory period for junior high school entrance examination” and “Diversification of “Education” expected”, etc.

研究分野：社会科学

キーワード：教育社会学 早期選抜 ペアレントクラシー 中学受験 キャリアデザイン

1. 研究開始当初の背景

子どもの安全、学力、情操、将来の進路など、我が子にできるだけ良い教育環境を与えたいというのは、多くの親の願いであろう。

この10年余の社会状況の変化の中で、教育の営みという文化領域はますます重要な位置を占めている。多くの社会移動・階層研究が示してきたように、教育は、人々の社会経済的地位を左右する有力な社会移動の手段ないし機会とみなされているが、幼児教育から各学校教育段階、高等教育までの諸教育機関の今日的なあり方は、久富(2007)が指摘するように、そこでの算出(学習者たちの学力や進路などを含め)を通して、家族・地域間の格差の広がりを再生産する働きをしている。

望月(2011a)は近年の小学校受験の拡がりを実証的に明らかにし、受験やそのための準備教育が低年齢化する背景には、教育問題や家庭問題、社会問題にいたる深い問題が潜んでいることを指摘している。かねてより、子どもの進路に対する親の階層(社会的地位)の規定力の大きさは多々指摘されているが、1990年代以降の経済不況により、家庭の経済状況が子どもの進路を規定する力は増大しており、近年の日本社会を「ペアレントクラシー社会」として捉え、それがさらなる階層化、格差社会化へと繋がる可能性を指摘する議論もみられるようになった。例えば望月(2011a)は、私立小学校受験に潜む現代的な家庭の教育戦略を明らかにし、いまや私立小学校受験は国公立大学を含む難関大学に進む有利なルートへの早期選抜となりうるものであり、その過熱や拡大が、家庭の経済的・地域的背景に基づく階層の二極分化を進める可能性を指摘している。

Brown(訳書2005)によれば、市場化された社会における教育的選抜は、本人の能力や努力といった「業績」よりも、親の富や願望といった「ペアレントクラシー」に基づくものへと変質する。耳塚(2007)によれば、親の富(学校外教育費支出、世帯所得)と願望(学歴期待)が子どもの学力を規定しているという意味で、日本社会もまたペアレントクラシーへの道を歩んでいると推測できるという。受験やその準備教育が低年齢化するにつれ、親の富の大きさが問われ、親の願望や動機づけが大きな影響力をもつ。ペアレントクラシー社会では、藤田(2006)も指摘するように、多くの保護者は、教育の機会や過程が早くから格差化・差別化されていることを無視できなくなり、これまで以上に幼少期の早い段階から、知的学力の形成を重視し、そのために子どもを勉強に駆り立てることにものりかねない。実際に、リーマンショックによる景気の悪化が叫ばれているにもかかわらず、私立小学校に通う児童は増加傾向にあり、中学受験への関心も薄れてはいない。

欧米では1960年代以降、早期選抜問題が階層間の不平等問題と関連して社会学的な

研究対象となり、教育政策上の課題にもなっている。しかし日本では、興味本位の批判や揶揄の多さに比べ、早期選抜問題としての小学校受験や中学受験、そのための準備教育について学術的に明らかにしてきたとは言いがたい。片岡(2008)は2006年に「子どもの教育に関する実態調査」を実施し、小学校受験や中学受験についても言及しているが、サンプル数の少なさと地域の偏りがみられる。Benesse教育研究開発センター(2008)は2007年に「中学校選択に関する調査」を全国規模で行い中学受験の実情を報告しているが、世に広く示す役割に終始しており、学術的な考察には至っていない。さらにいえば、両研究ともにリーマンショック以前の調査である。それ以降の経済不況により、何らかの変化が生じている可能性も大いに考えられる。近年は公立中高一貫校の数が著しく増えており、志願倍率の高さや大学進学実績の良さも着目されている。

こうした現状を看過することなく、片岡(2008)やBenesse教育研究開発センター(2008)などの先行研究もふまえて、現代の日本型早期選抜およびその準備教育にみられるペアレントクラシーの実態や課題を明らかにしていくことが、学術的にみても教育政策的にみても必要ではなからうか。

参考文献

- Benesse教育研究開発センター,2008,『中学校選択に関する調査報告書』研究所報告VOL.48.
- Brown, Phillip, 1995, 'Cultural capital and social exclusions: some observations on recent trend in education, employment and the labor market', Work, Employment and Society 9, B.S.A. Publishment Ltd., Cambridge University Press (=2005, フィリップ・ブラウン「文化資源と社会的排除」A・Hハルゼー他編、住田正樹他編訳『教育社会学 第三のソリューション』九州大学出版会)
- 藤田英典,2006,『教育改革のゆくえ 格差社会か共生社会か』岩波ブックレット688.
- 久富善之,2007「特集テーマ<「格差」に挑む>について」『教育社会学研究』第80集,pp5-6.
- 片岡栄美,2008「小・中学校受験にみる親の教育戦略」『子どものしつけ・教育戦略の社会学的研究』平成17年度~19年度科学研究費補助金 基盤研究(B)研究成果報告書,pp53-79.
- 耳塚寛明,2007「小学校学力格差に挑む だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』第80集,pp23-39.
- 望月由起,2011a,『現代日本の私立小学校受験 - ペアレントクラシーによる教育選抜の現状 - 』学術出版会.

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、申請者による科学研究費補助金若手研究 B「受験（準備）の低年齢化に対する教育社会学的研究（平成 21 年度～平成 24 年度）」の追跡的研究であり、日本型早期選抜およびその準備教育にみられるペアレントクラシーの実態を実証的かつ多面的に明らかにすることである。

先に記した「研究開始当初の背景」をふまえ、本研究では中学受験に焦点をあて、「当事者の学習行動・キャリア意識・キャリア展望」「その背景にある家庭の経済力や教育戦略」などを実証的に明らかにし、日本型早期選抜やその準備教育にみられるペアレントクラシーの実態や課題について、考察や提言を行うこととする。

さらにはペアレントクラシー研究の今後の発展にむけて、「高学歴者にみられる幼少時の親のキャリアデザイン」にも目を向け、「親が我が子に描くキャリアデザインとその現実性」についての検討を加える。

「早期受験準備 有名幼・小・中・高 銘柄大 銘柄職場 生涯保障という図式を信じて子どもを塾に追いやる親のあり方（馬居 1998）」はかねてより批判されてきたにもかかわらず、望月（2011b）は、小学校受験に臨む親が我が子に描くキャリアデザインは明確かつ極めて高学歴志向であり、小学校低学年時からの通塾を半ば当然視する傾向があることを指摘している。本研究では、中学受験に臨む家庭においても同様の傾向がみられるのかを検証するとともに、こうしたキャリアデザインの現実性についても目を向け、今後の研究にむけての仮説生成を試みる。

本研究の成果は、格差社会といわれる現代の日本社会の内実や、新たな階層形成プロセスについて議論をすすめる際の実証的なデータとして有益なインプリケーションを付与しうるものであり、広く社会に与えるインパクトも期待できる。

### 参考文献

望月由起, 2011b, 「私立小学校受験家庭が描く子どものキャリアデザイン 受験理由および望む教育環境・学歴に着目して」日本キャリアデザイン学会「キャリアデザイン研究」第 8 号, pp71-85.

馬居政幸, 1998 「『少子化』に関する研究状況とその課題」『子ども社会研究』第 4 号, pp127-134.

## 3. 研究の方法

本研究では、先に述べた「研究目的」を達成するために、主に以下の調査を行った。

(1) 国私立小学校の生徒の学習行動に関する縦断的調査（4 年生時・5 年生時・6 年生時のパネル調査）

・実施時期：

2013 年 4 月から 2016 年 3 月。

・調査対象：

申請者による科学研究費補助金若手研究 B「受験（準備）の低年齢化に対する教育社会学的研究」の調査協力者 297 名。

・調査方法：

質問紙および返送用封筒を郵送し、返送を求めた。

・主な調査項目：

- ・子どもの教育や将来に対する家庭の考え
- ・子どもの習い事（種類、曜日、月謝など）
- ・子どもの将来のキャリアデザイン
- ・入学した小学校における中学受験指導
- ・保護者の社会観・勤労観 など

(2) 中学受験に臨む児童の学習行動等及びその家庭の教育戦略に関する調査

・実施時期：

2015 年 2 月及び 2016 年 2 月

・調査対象：

首都圏（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県）および関西圏（大阪府・京都府・兵庫県・奈良県）に在住し、2016 年度及び 2017 年度中学受験に臨む児童のいる家庭、各年度 300 件。

・調査方法：

インターネットによる Web 調査。

・主な調査項目：

- ・子どもとの接し方・かかわり方
- ・子どもの教育・育児に対する考え
- ・子どもに希望する進路
- ・家庭の暮らし向き・世帯年収
- ・保護者の就労状況・最終学歴・出身高校
- ・保護者の社会観・勤労観 など

(3) 中学受験を経験した大学生に対する振り返り調査

・実施時期：

首都圏国立大学の学生

...2013 年 4 月から 2015 年 3 月。

首都圏私立大学の学生

...2015 年 4 月から 2017 年 3 月。

・調査対象：

中学受験を経験し、現在、首都圏の国立大学あるいは私立大学に在籍する大学生。国立大学生 200 名（インタビュー調査は 30 名）、私立大学 600 名（インタビュー調査は 30 名）。

・調査方法：

質問紙調査を実施し、一部学生に対しては半構造化インタビュー調査も行った。

・主な調査項目：

- ・これまでの受験（およびそのための準備）経験
- ・小学生の頃までの習い事経験
- ・中学受験時に描いたキャリアデザイン
- ・中学受験時の親のサポート
- ・現在のキャリア意識・展望
- ・現在の社会観・勤労観
- ・現在の保護者との関わり など

#### 4. 研究成果

先の「研究の方法」にて挙げた各種調査、中学受験塾や国立・私立小学校における観察及び情報収集、書籍や研究論文・報告書などにより得た主な成果は、以下のとおりである。

##### (1) 中学受験準備期間の長期化

小学校受験（お受験）ではその準備教育にあてる期間は1~2年間程度の家庭が多くみられたが（望月 2001a）中学受験に対しては、以前に比べ、早期の段階からより長期間にわたっていることが分かった。小学校低学年から中学受験を見据えたクラスを設定する中学受験塾も増えており、経済的・地理的条件が合えば、5~6年間の準備教育に臨む家庭も少なからずみられた（首都圏国立大学に通う学生に対する振り返り調査からも、同様の結果が示されている）。

また、小学校受験（お受験）に臨む家庭に比べると家庭の世帯年収平均は低いものの、その準備教育にあてる費用は、その長期化もあって、より多額に上っていることも示されている。特に私立中学を受験する（公立中学の受験を希望しない）家庭において、その傾向が顕著にみられた。

その一方で、国私立小学校に通う家庭に対する縦断的調査の結果からは、4年生時までは中学受験を希望していても、5年生時になると（中学受験をせず、併設された中学校に進学するといった）進路変更をするケースが少なからずみられた。

##### (2) 親が見据える「教育」の多様化

中学受験に臨む多くの家庭では、そのための準備教育として子どもを中学受験塾に通わせる以外にも、より早期の段階から少なからずの「習い事」を経験させていることがわかった。

代表的な「習い事」は、「英会話・英語」である。中学受験の入試科目に「英語」は含まれていないが、我が子の将来のキャリアを見据え、就学前から経験させている家庭も多くみられた。

「グローバル人材の育成」が推進される中で、近年、海外進学を目指す家庭が増えていることは多々指摘されているが、中学受験家庭においても同様の傾向がみられた。海外進学を視野に入れる中高一貫進学校や塾・予備校もみられるようになり、我が子を海外進学、特に海外名門大学への進学に向けて有利な環境におくために、早期からの選抜や準備教育に注力する家庭が増えていると思われる。

また、幼少期より「スポーツ活動・芸術活動」に注力する家庭も多くみられた。ただし、「英会話・英語」とは異なり、その活動を将来のキャリア展望と直接的に関連付けている家庭は少なく、「体力作り」「教養・趣味」といった理由から臨む傾向がみられた。

従来のペアレントクラシー研究では、「我が子の進路を見据え、日本のトップレベルの

学歴（学校歴）の獲得に注力する家庭」に焦点をあててきた。しかし本研究や近年の各種調査報告等からは、多様な教育活動に早期より注力する家庭の様相も浮かび上がっている。

今後は、現代の社会状況を鑑み、日本型ペアレントクラシーの実態を多面的に明らかにすることが、学術的にも教育政策的にも意義があり、喫緊の課題であるといえるだろう。

本研究の最終年度にあたる平成28年度には、本研究の成果をとおして浮かび上がった研究課題を明確にし、今後の研究計画にもあたった。それに基づき、科学研究費助成を新たに申請し、平成29年度以降も本研究を発展的に継続させることを可能とした。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

望月由起、国立小学校の現代的特質 - 教育活動と保護者の関わりに着目して -、日本教育学会、2015年8月30日、お茶の水女子大学（東京都）

望月由起、大学生の社会観・就労観 - 中学受験経験に着目して -、日本教育社会学会、2013年9月22日、埼玉大学（埼玉県）

望月由起、大学生の保護者依存傾向 - 中学受験経験に着目して -、日本教育学会、2013年8月30日、一橋大学（東京都）

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

特になし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

望月 由起 (MOCHIZUKI YUKI)

昭和女子大学・総合教育センター・准教授  
研究者番号：50377115

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし

##### (4) 研究協力者

なし